

# 列聖から 10 年

## —聖人ファン・ディエゴ崇敬の現在—

中村 千萩

2002年7月31日、メキシコ市に位置する聖母グアダルूप寺院 (Insigne y Nacional Basílica de Guadalupe) において、当時の教皇ヨハネ・パウロ2世により、アメリカ大陸初となる先住民の聖人ファン・ディエゴ (San Juan Diego) がメキシコに誕生してから早くも10年あまりが経過した。四半世紀を超える長い任期の中で、世界各国を巡っては各地で福者と聖人を作り出していったヨハネ・パウロ2世 (在位1978年10月16日—2005年4月2日) であったが、晩年は病気の進行とともに外国訪問が困難になり、渡航先を厳選する中で選ばれた行き先の一つがメキシコであった。ファン・ディエゴを列聖するためだけにでもメキシコ訪問を希望するという教皇のたつての願いによって実現した5回目のメキシコ訪問であったが<sup>(1)</sup>、2005年4月に教皇は逝去、その後の教皇選挙コンクラーベによって選ばれたベネディクト16世 (在位2005年4月19日—2013年2月28日) も、生前退位という異例の方法で教皇の座から退くことになり、後任に選ばれたのは、史上初のアメリカ大陸出身の教皇フランシスコ (在位2013年3月13日—) であった。ベネディクト16世の任期が8年と短かったために、ファン・ディエゴの列聖から10年余りの間に、こうして3人の教皇が擁立されることになった。

本稿では、スペイン人による征服後、1531年にメキシコに出現したとされる聖母グアダルूपとの邂逅者ファン・ディエゴをめぐる状況が、列聖から約10年を経た現在どのような様相を見せているかを取り上げる。まず前半では、列聖の手続きが始まった20世紀末から列聖までの経緯を、歴史家ブレイディングとプールの著書を参考にしつつ述べる。列福・列聖には、その手続きの性質上、地元からの聖人の擁立を求める高位聖職者らの強い熱意と、承認するバチカンおよび教皇側の積極的な関与が不可欠であり、ファン・ディエゴの列聖の場合にも、その実現までには両者の間の政治的ともとれる緊密なやり取りがあった。後述するように、特にファン・ディエゴの事例の場合、教皇ヨハネ・パウロ2世の果たした役割は大きい。バチカンとメキシコのカトリック教会の双方が、それぞれに政治的思惑を抱えるなかで、異例のスピードで実現した列聖であったが、一部の聖職者や学者、知識人の間でこそ、ファン・ディエゴの実在性や出自等をめぐり激しい論争があったものの、それは一般信徒を広く巻き込んだ議論ではなかった。また、ファン・ディエゴへの崇敬は信徒らの間で自然発生的に起こったものとはいえ、聖母に出会った先住民が具体的にどのような人物であったのかは、列聖が行われた直前の段階でも、一般信者は

もとより聖職者にとってさえ曖昧なものであった。

よって、列聖が実現した後のメキシコのカトリック教会の課題は、皮肉にも一部の高位聖職者らと一般信徒との温度差を埋め、ファン・ディエゴを広く信徒に知らしめるところから始まった。後半では、聖母崇敬に篤く、メキシコでの人気も高かったヨハネ・パウロ亡き後、メキシコ教会が主導する形でなされたファン・ディエゴ崇敬の普及が、どのような形で行われ、またどのように展開し、2013年のアメリカ大陸初の新教皇の選出によって現在どのような局面を迎えているのかを、現地調査の資料を交えて説明していきたい。

## 1 ヨハネ・パウロ2世による列福と列聖

ヨハネ・パウロ2世は、任期中に104ヵ国を訪問し、1282人を列福、456人を列聖した。その人数は、それ以前の教皇全員が行った列福、列聖の人数よりも多く、ヨハネ・パウロ2世が前例をみないほど外交に力を入れていた教皇だったこと、1983年1月25日の使徒教令“*Divinus perfectionis Magister*”により、列聖省の審査の規程を大幅に改めたことによって、列聖が容易になったことがその背景にある<sup>(2)</sup>。列福はまず、地元の聖職者らによってある人物が推薦されることから始まる。その後、その人物が殉教者であるか、または高德な人物であったかどうかについて、地元の聖職者らが資料を集め、*positio*（列聖審査書）と呼ばれる通常数千ページに及ぶ膨大な資料を列聖省に提出する。その審査書が同省の専門家らの査定を通り、教皇からの承認を受けたとき、その候補者は列福され、福者となる。列福は列聖の前段階であり、列福の段階ではその人物はある地域限定の崇敬対象であるが、列聖されるとその地域を越えて世界中で崇敬対象とされることを認められる。徳の高さに加え、その人物のとりなしによって病気が治癒したなどの奇跡が一つ以上あることが列福の要件となるが、列聖にはそれとは別にもう一つ別の奇跡の証明が必要となる。審査書の作成にあたっては、地元の申請代理人（*postulator*）が何度もバチカンに通り、どのような資料が不足しているかなどの助言を受けて改善を重ねる必要があり、必然的に、世界中から推薦される人物らの中でどの人物が実際に列福され、最終目的である列聖までたどり着くことができるかは、その人物がどれだけ地元で篤く崇敬されているかによってというよりも、列聖省に提出する資料の作成を、地元の聖職者らがいかに適切に行うことができるかによって決まるという一つの側面がある。これには人力に加え財力も必要となり、協力者が多いほど列聖が実現する可能性は高まる<sup>(3)</sup>。

地元の聖職者とバチカン内部の聖職者らとの連帯は不可欠であり、このような手続きの性質から、列福、列聖には双方の政治的な思惑が絡みやすい傾向がある。列聖省によって行われる審議は閉鎖的で、その可否の基準は曖昧であるため、外部の者が詳細を知ることは難しい。加えて、神学的に問題とされるのは、バチカン公会議（1869-1870）で決定された教皇の無謬性という教義との関わりである。最終的に、列福・列聖を承認するのは教皇であるが、地上における神の代理である教皇が、使徒継承の最高権威として信仰と道徳について語る時、その判断に間違いはないとする教皇の無謬性の教義に、個々の事例が当てはまると考えるかどうかによって、列聖、列福が批判の対象となる場合がある。

興味深いことに、教皇の無謬性の教義を定義したバチカン公会議の資料の中にも、1983年の

使徒教令にも、列聖に関する教皇の無謬性についての言及は存在しない。よって、ウッドワードによれば、多くの神学者は列聖を教皇の無謬性の一例とは考えていない。しかし列聖省の職員は、個別の列聖は教皇による間違いのない判断であるということに疑問を持っておらず、彼らの立場を正当化するように古くからの神学的見解の伝統を指摘する<sup>(4)</sup>。ここに明らかな矛盾が存在する。端的に言えば、教皇の判断は、彼が教皇であるがゆえに無謬であるが、聖人を作り出すシステムは無謬とはいえないのである<sup>(5)</sup>。また、ある人物の列聖を目指し資料を準備する側にとっては、福者が聖人の地位に上げられ、その地位が教皇の無謬の行為として永遠に保障されるということが、長い年月を費やして煩雑な手続きを完了させる努力を惜しまぬ動機の一つである。

通常、列福された段階ですでにその人物の高徳は認められており、列聖が教皇の無謬性による保護を必要とするほどに重要なものなのかどうかは今も議論が尽きないテーマであるが、列福については、それが正式な列福 (formal beatification) であろうと列福に相当するもの (equivalent beatification) であろうと、教皇の無謬性を問うべきでないというのが神学者らの一般的な考え方である<sup>(6)</sup>。よって、候補者がある限定された地域の崇敬対象である福者にとどまることと、最終段階まで進み、教皇の判断によってカトリック界全体からの崇敬対象として認められ、その名前が聖人名簿に載ることの違いは、地元の聖職者らにとって非常に大きい<sup>(7)</sup>。一度列聖されたのちに、その妥当性が問われる例も存在するが、列聖省が改めて審議することはなく、列聖省の職員によればその理由は、再審議することで、教皇の無謬性について後から異論をさし挟むという立場に列聖省が置かれることになるからである<sup>(8)</sup>。バチカン内部の人間が教皇の無謬性を疑うようなことはできないのである<sup>(9)</sup>。ヨハネ・パウロ 2 世は、地元の人々にとって身近な人物を数多く列福、列聖することで、カトリックを身近なものにした一方、各地でこのような議論を生み出していったともいえよう。

## 2 ファン・ディエゴの事例

### 2-1 19 世紀終わり～ヨハネ・パウロ 2 世教皇就任まで

ファン・ディエゴの列福、列聖はどのような過程で行われたものだったろうか。ファン・ディエゴを聖人という着想は、聖母グアダルupesの歴史をめぐる出現派と反出現派の激しい論争が最高潮に達していた 1888 年、聖母出現を史実と考える出現派の詩人、ホセ・ホアキン・テラサス (José Joaquín Terrazas) の提案に始まった。数人の聖職者らが列聖に同調し、そのうちの一人が第二回メキシコ・カトリック会議において手続きを請願した。1931 年にはラウロ・ロペス・ベルトラン (Lauro López Beltrán) がファン・ディエゴというタイトルの雑誌を刊行、また 1939 年、ホセ・デ・ヘスス・マンリケス・イ・サラテ (José de Jesús Manríquez y Zárate) が、4 世紀もの間我々がファンの存在を忘れていたことは非常に残念だとし、手続きをするよう働きかけた。翌年、当時の大司教は、列福のための委員会を設置したが、規程に従っていなかったためバチカンの承認は得られなかった<sup>(10)</sup>。

一方、バチカンが聖母グアダルupesに注目し始めたのは、1904 年に教会がバシリカの地位に上げられて以降のことであった。1910 年に教皇ピウス 10 世がグアダルupesを「ラテンアメリカ全土の聖母」、1935 年に教皇ピウス 12 世が、聖母の守護の範囲をフィリピンにまで拡大し、1945

年に同教皇は「メキシコの女王、アメリカ大陸の女帝」とした。

こうして聖母信仰に篤い教皇が続いたが、列聖が現実的になるまでには、さらなる時間を要した。1951年、大司教はバチカンに送る資料を準備するように歴史家を指名したものの、その努力も実らなかった。1974年、ファン・ディエゴの死から500周年と考えられていた年に、メキシコとラテンアメリカの聖職者らは、カトリック平信徒の模範としてファン・ディエゴの列聖を提案した<sup>(11)</sup>。

## 2-2 ヨハネ・パウロ2世の教皇就任

このような状況を変えたのは、聖母崇敬に篤いカール・ヨゼフ・ポイティワの1978年の第264代教皇への就任と、その後のメキシコ訪問である。1979年1月14日の初訪問の際、ヨハネ・パウロ2世は聖母グアダルupes寺院において、「慈悲深いテベヤクの聖母が先住民ファン・ディエゴに話しかけたとき、メキシコの人々の中にキリスト教信仰がはっきりと入ってきた」と述べ、歴史的人物としてファン・ディエゴに言及し、彼をメキシコの福音の基礎であるとした。また、母国ポーランドの例を用いて、「私の母国ポーランドには、ポーランドはsemper fidelisであるという言い方がある。メキシコはsemper fidelisである、メキシコはいつも信心深い（“México Siempre Fiel”）と言えることを願う」<sup>(12)</sup>と述べて、母国ポーランドの次に訪問したメキシコに対して、特別に親しみを感じていることを表した。

教皇の訪問後、当時のメキシコ大司教エルネスト・コリピオ・アウマダ（Arzobispo Ernest Corripio Ahumada）は、本格的に列聖の手続きに乗り出した。聖職者らと会議を重ね、1979年10月25日に、エンリケ・サラサル（Enrique Roberto Salazar Salazar）を地元の申請代理人（postulator）に任命し、同年11月に彼を必要書類の確認のためにローマに向かわせ、その後、大司教は列聖省の歴史課主任アゴスティン・アモレ（Agostino Amore）と会議をして、従うべき規程の複写を受け取った。しかし、バチカンにおけるエンリケ・サラサルへの待遇は決して好ましいものではなかった。活動を開始した矢先に歴史課主任が逝去したため、手続きは棚上げになり、彼は別の高位聖職者を探して、長期に渡り人脈作りに奔走することになった<sup>(13)</sup>。1982年7月8日、ようやく列聖省はメキシコ大司教に書類を受け取った旨を告げたが、書類は網羅的ではなくてはならず、考古学、図像学、象形文字学、言語学の資料が必要だと伝えた。図像学について、司教サンドロ・コラディーニ（Sandro Corradini）は、ファン・ディエゴが古くから崇敬の対象となっていたことを示す後光の描かれた像があれば、列福への道が開かれるだろうと助言した。これに従い、16世紀の美術の専門家を含む新たな委員会が設置された。この時提出された像の中には、後光の描かれた肖像画や、のちに公式像となる「神のしもべファン・ディエゴの真実の肖像“Verdadero Retrato del siervo de dios Juan Diego”」と書かれた18世紀初頭の肖像画が含まれていた<sup>(14)</sup>。1986年3月23日に書類はまとめてローマに送付された。

先述の通り、1983年1月に列聖省の審査の規程は大幅に改められた<sup>(15)</sup>。この年の10月、列聖省の報告官<sup>(16)</sup>であるジョバンニ・パバ（Giovanni Papa）が手続きの総指揮を引き受け、総報告官となった。1984年1月、メキシコ大司教によって、アントニオ・カイロリ（Antonio Cairoli）が申請代理人に<sup>(17)</sup>、エンリケ・サラサルが副申請代理人に任命された。外部顧問はロメロ・サリ

ナスRomero Salinasであった。1986年、メキシコでの教区調査が終了し、次の段階であるローマでの調査に入ることをバチカンは公式に認めたが、総報告官ジョバンニ・パパがその後厳密な調査を求めたことで、手続きは難航した。列福、列聖の手続きの上で最大の障害となったのは、寺院の最高責任者であるグアダルーペ寺院修道院長その人からの抗議であった。

1987年1月9日、列聖省長官が手続きを有効と認めたことにより、グアダルーペ寺院修道院長からの抗議の手紙によって棚上げされていた審査書の作成は、教会法上の手続きをもって着手されることが可能になり、ファン・ディエゴは尊者となった。審査書は、ファン・ディエゴの高徳を示しつつ、彼が古くから崇敬されていたことを強調すべきとされた。ローマにあるイエズス会やフランシスコ会の文献も調査の対象となったものの、ジョバンニ・パパは、抗議の件が解決しない限りは正式な準備はできないという意見を曲げなかった。1987年4月、修道院長からの抗議の内容についての回答がローマに送られた。しかしこの時、出現譚の基本的な部分に反する資料も提示された。ファン・ディエゴの子孫が現在まで生きていることや、テスココの王家の出身だったという内容である。これは、顕現譚の原型とされているニカン・モポウア（Nican Mopohua）の、ファン・ディエゴとその妻は生涯貞操を守ったという記述や、ファン・ディエゴは庶民であったという不変の記述に反するものであった。

ジョバンニ・パパは、ファン・ディエゴに関する矛盾点を厳密に調査するよう指示し、修道院長によって提示された批判に耐えうる審査書の作成を要求した。ファン・ディエゴの略歴はこの段階でまとめられた。ファン・ディエゴはチチメカ族、つまりメキシコ中央部の文化的に進んだ先住民の出自であるとされた。これを証明する文献は不明だが、彼の出自が王家という推定とは異なるものだった。1989年2月、副申請代理人エンリケ・サラサルと外部顧問ロメロ・サリナスはローマに出発し、要求された書類がそろったことを報告した。アントニオ・カイロニが亡くなったので、コリピオ・アウマダは新しくパオロ・モリアーニ（Paolo Molinari）を申請代理人に任命し、彼の協力で1989年6月30日、資料の集成がジョバンニ・パパに提出された。彼はコリピオ・アウマダに調査の結論を伝え、ジョバンニ・パパは、史学者の意見を求める会議を招集するよう求めた<sup>(18)</sup>。

1989年10月9日に開かれた21人の会議では、満場一致で調査内容は正しいと認められ、11月にドゥランゴで開催されたメキシコ聖職者会議では、ファン・ディエゴの列福を求める書簡を教皇に送ることが満場一致で可決された。史学者の調査ののちに行われた神学者らによる調査でも満場一致であった。1990年2月5日、ジョバンニ・パパは詳細と結論を確認し、署名した。3月の神学会議では8人の顧問から異論は出ず、満場一致で承認された<sup>(19)</sup>。

### 2-3 ファン・ディエゴ列福—Equivalent Beatification

1990年4月8日、大司教コリピオ・アウマダは教皇ヨハネ・パウロ2世に、列聖の代わりにファン・ディエゴの賛美を行ってくれるよう頼んだが、教皇はこれを拒否した<sup>(20)</sup>。1990年5月6日、教皇は列聖式でグアダルーペ寺院においてファン・ディエゴの崇敬を行うことを認めたが、これは列聖省による正式な列福ではなかった。ロメロ・サリナスは「聖下ヨハネ・パウロ2世は、列福の法令をもって聖母の伝説が正当であると確認した」としたものの、テペヤクの丘での出来

事はアメリカ大陸の福音にとって非常に重要であること、ファン・ディエゴの生涯について知られていることは少ないという内容で、その崇敬を祝福したものであった。同日発布した教皇布告では、ファン・ディエゴの生涯の神聖さとその崇敬が古くから行われていたことを認め「古代の聖書の人々がすべての人類を代表するように、ファン・ディエゴは、聖母のとりなしによって、イエスの福音に招かれるすべての先住民を代表していると言うことができる」と明確に発言しているが<sup>(21)</sup>、列聖式には曖昧な部分があった。帰国した教皇は、自分はファン・ディエゴへの崇敬を承認しただけだと述べている。あるバチカンの官僚はこの列福を「控えめな列福 *beatificación en tono menor*」と呼び、他の者は「列福に相当するもの *aequipolenter*」と呼んだ<sup>(22)</sup>。

#### 2-4 列聖の実現にむけて

大司教コリピオ・アウマダは、ファン・ディエゴの列福が、正式な列聖式を通して行われなかったことを残念に思っただろうことは想像に難くない。コリピオ・アウマダは 1981 年、教皇の初訪問を記念し、聖母出現 450 周年の祝祭の一環として、グアダルーペ寺院前の広場全体を見渡せる位置に高さ約 3.7m のヨハネ・パウロ 2 世の銅像を建てている。1983 年には、バチカンの敷地内に聖母グアダルーペを祀る礼拝堂を建設することを申請し、教皇がこれを承諾したため、建設は 1992 年に開始されたが、これは新大陸福音 500 周年に合わせて行われたものだった。

礼拝堂建設を教皇が歓迎する様子は、着工の際の言葉にも表れている。「この礼拝堂はテペヤクの丘のバチカンへの延長であり、ラテンアメリカと普遍的な教会の親密な交流をより明白にするものである」、「メキシコは教皇への忠誠において際立っているが、キリスト教信仰の中心である聖母グアダルーペの美しい礼拝堂をもって、マリア崇敬のみならず、その歴史的根源と、すべての教会に資する文化の強い統合を証明することを望んでいる」と述べ、ローマに巡礼する際にはメキシコ人はこのサロンを訪問することを忘れないであろうと加えている<sup>(23)</sup>。サン・ピエトロ大聖堂の地下の歴代教皇の墓地に祀られる聖母像は現在まで二体のみだが、一つはポーランドのチェンストホーヴァの聖母、もう一つはメキシコのグアダルーペの聖母である。

この礼拝堂の建設に、聖母出現が歴史的事実であることを裏付ける人物であるファン・ディエゴを、ぜひ世界的な崇敬対象にというメキシコの聖職者らの思いはさらに高まったと考えられよう。コリピオ・アウマダの後継者として、1995 年に首座大司教に就任したのはノルベルト・リベラ・カレラ (Norberto Rivera Carrera) だが、彼は就任当初から、列聖に反対するグアダルーペ寺院修道院長シューレンブルグ (Guillermo Schulenburg Prado) を激しく非難した。シューレンブルグは、決して聖母グアダルーペ崇敬の価値を認めていなかったわけではないが、神学的問題と歴史的問題は別であり、歴史性が疑わしい人物を列聖することにより、それを承認したカトリックの権威への信頼が失われることを危惧して、ファン・ディエゴの存在を歴史的事実とする出現派に抵抗した。

通常、列福のあと列聖が行われるのに必要なのは、もう一つの奇跡の確認のみである<sup>(24)</sup>。しかし 90 年代、出現派と反出現派の対立は厳しさを増し、シューレンブルグのみならず、シューレンブルグを支持する反出現派の学者らの出版物が抗議の手紙とともに何度もバチカンに送られた。1996 年には、スキャンダルを機にシューレンブルグは解任に追い込まれたが、1998 年初め、

列聖省はメキシコ聖職者らとともに、より詳細に史実を調査し始めることを決めた。前任の列聖省長官逝去に伴い、新しく就任したホセ・サライバ・マルティン（José Saraiva Martins）は教理省の出身であったが、シューレンブルグは1998年に彼に手紙を送った<sup>(25)</sup>。1999年1月の教皇訪問の際にファン・ディエゴの列聖式が行われることは、メキシコ人聖職者らの願いであったが、バチカンから何も言及がなく列聖は見送られた。

## 2-5 ファン・ディエゴの再解釈

メキシコ国内で起こっていた出現派と反出現派の論争は、こうしてバチカンを巻き込む形で激しさを増し、反出現派の反発に対抗するかのようになり、出現派の論調は語気を強めていった。加熱するファン・ディエゴ列聖運動の中で、出現派の聖職者らは出現譚の本筋から逸脱した仮説を述べるようになった。2000年5月に開設されたファン・ディエゴのHP上で、その略歴について、列福の前段階で一度訂正されたはずの顕現譚に反した解釈が掲載されたのである。副申請代理人であるゲレロ・ロサド（José Guerrero Rosado）が知人の研究者に宛てた1月のメールの中で、彼はバチカンの依頼で長年調査を進めるうちに、真実のファン・ディエゴのアイデンティティにたどり着いたと述べて、「我々が今まで考えていたような一般の先住民ではなく、テスココの王家の出身で、勇敢な将官であり、哲学者であり、詩人であった。16世紀の王家の習慣として7人の妻を持っていたが、キリスト教徒となりキリストの大使となるべく、メキシコ人のみならず世界中の人々のためにこれらすべてを手放した」と発言していたことが掲載された。さらに、「ファン・ディエゴはじきに教会の歴史の中でもっとも偉大な聖人の一人となるだろう。アブラハムやモーゼに倣い、父祖patriarcaのような人物として認識されるだろう」と述べており、彼が王族の出だったことは、聖母のメッセージをアステカ全土に説得力を持って広めるのに好都合だったとした<sup>(26)</sup>。この文章そのものは書籍化されていないが、列聖を記念して出版された書籍のなかで、ファン・ディエゴは新たなモーゼであるという解釈が繰り返されている<sup>(27)</sup>。ファン・ディエゴは、メキシコやラテンアメリカだけでなく、世界的に影響のある人物であるという神学的解釈がなされ始めた。ゲレロ・ロサドとチャベス・サンチェス（Eduardo Chávez Sánchez）は、ファン・ディエゴは生涯貞操を守ったとしたが、1979年から22年間申請代理人を務めたエンリケ・サラサルは、彼は貴族で9人の子があり、その子孫が今もメキシコにいるとして、2002年初め、自分を列聖手続きの主役から外そうとする首座大司教ノルベルト・リベラと2000年に就任した寺院修道院長ディエゴ・モンロイ（Diego Monroy Ponce）を非難した<sup>(28)</sup>。10年前にすでに列福され、列聖が実現する数年前の段階にあっても、ファン・ディエゴの人物像は出現派の聖職者らの間でさえ必ずしも一致していなかったのである。

先住民文化を称揚する立場のメキシコ人にとっては、ファン・ディエゴが文武両道で、社会的に高い地位にあったとすることは、自己同一視の対象としてより好ましいと考えられる。しかし、貧者を聖母が救うという顕現譚の基本からも、教皇が述べてきた貧者の救済の理念からもこれらは外れることになる。

2000年半ば、ヨハネ・パウロ2世は、これ以上のスキャンダルを避けるため、年内の列聖を行わない意向を発表し、バチカン当局は調査を有効としつつも、列聖を急ぐ必要はないと述べた。

このような行き詰まりにメキシコの高位聖職者らは激しく反応し、メキシコ人枢機卿らはバチカンに出向いた際、列聖の遅れはメキシコ人への侮辱であると訴え、ディエゴ・モンロイと司教座聖堂参事会員らは列聖を遅らせないようにという嘆願書を送った。また、バチカンからの発表に先んじて、2001年10月30日、列聖は2002年中に行われる予定であるとメキシコのテレビを通じて大司教ノルベルト・リベラは発表した。メディアを通して、メキシコ側がバチカンをせかすような形となった<sup>(29)</sup>。

## 2-6 「ファン・ディエゴ」を求めて

グアダルーペの顕現譚の場合、聖母が先住民の前に現れたということは、単に不遇な人物の前に聖母が出現したということ以上の意味を持つ。メキシコ人は征服という暴力によって不可避的に混血民族となったが、褐色の肌をもつ聖母グアダルーペが被征服民である先住民の前に現れたことによって、その出自を祝福されたのである。人種による差別は、同じ白人であっても生まれがスペインであるか新大陸であるかによって分けられるほど厳しいもので、スペイン生まれの白人よりも一段下の社会階層に属するとされた新大陸生まれの白人であるクリオーリョを中心に、17世紀半ばに聖母グアダルーペの顕現譚の原型ができたと考えられている。

しかし、邂逅者であるファン・ディエゴを聖人という運動が最初に起こるのは、19世紀末とそれほど古いものではなく、実際にその手続きを始めたのは、前任のメキシコ大司教コリピオ・アウマダであった。実に出現から450年以上が経過しており、数多くの列福、列聖の中でも、これだけ時間が経ってからの列聖は稀である。歴史的資料の収集には限界があり、ファン・ディエゴの実在性を否定するにも肯定するにも、十分な資料が現存しておらず厳密な調査は難しい。プールによれば、出現派が主張する歴史観には偏りがある。スペインによる征服後、多くの人々が1531年の聖母出現をきっかけに一気に改宗したという事実は確認されず、それは教会側が自らの伝道の成功を主張しようとするものである。また、征服されたメキシコの多くの地域では、彼らが主張するほどの精神的貧困は経験されなかった<sup>(30)</sup>。つまり、聖母が先住民を救済したという顕現譚は、出現派によってよりドラマティックな歴史認識の上に描かれているのである。

顕現譚の真偽とは関係なく、聖母グアダルーペは現在では信者らの熱心な崇敬対象となっはいるものの、1983年にバチカンの列聖省の審査規程が変わったことにより、ファン・ディエゴの列福と列聖を巡ってはその実在性が議論の焦点とされ、一部の聖職者らの中での聖母グアダルーペ崇敬の論点は、聖母崇敬が持つ価値よりも、聖母との邂逅者の歴史性の証明にシフトしていった。ファン・ディエゴの存在が歴史的事実であるかどうか、聖母出現の真偽を左右する問題と捉えられるようになり、ファン・ディエゴが実在しなかったと認めることは、聖母が出現しなかったと認めること、つまり、聖母によるメキシコへの福音は幻想であり、聖母が混血のメキシコ人の出自を祝福したことはないと認めることに等しいという論理を導いた。しかし、ファン・ディエゴと自己の同一視を熱心に求めた出現派は、ただその存在が証明されるだけでは満足しなくなり、ファン・ディエゴの人物像について過剰な理想化を行ったのである。ヨハネ・パウロ2世の言動はときに火に油を注ぐものとなり、歴史的根拠の確認が十分でないまま、2002年7月31日の列聖式をもって、大勢を巻き込み、もはや収まりがつかないほど激化した論争に決着がつけら

れることになった。

### 3 ベネディクト16世の沈黙

27年間の在位中5回の訪問を果たした前教皇に対し、8年の在位期間の間にベネディクト16世がメキシコを訪れたのは2013年3月23日から4日間の一度きりであった。ベネディクト16世はメキシコ訪問をかねてから希望していたが、体調面の困難から2009年に一度延期され、2013年に最初で最後となるメキシコ訪問が実現された。その訪問先は、ヨハネ・パウロ2世が任期中に訪問を希望したにも関わらず実現することのなかったメキシコ独立運動の揺り籠・グアナファト市であった。教皇は同地で数千人の歓迎を受けたものの、前任の教皇の初訪問との歓迎の規模の違いは明らかであった。教皇が訪れたのはグアナファト市のみで、メキシコ市にあるグアダルペ寺院を訪れることなくキューバへと発った<sup>(31)</sup>。

列福、列聖についてのベネディクト16世の立場を推測しうるエピソードの一つは、1989年4月の教理省長官時代の、教会の聖人審査過程について批判的な発言である。教会は多くの聖人を輩出しすぎではないかというミラノの枢機卿に答え、「その中には、特定の集団にとっては重要であっても、多数の信者にとっては大きな意味をなさない聖人もいる」と発言、今後はより世界的に意味のある人物を聖人に上げるべきだと提案した。短い発言ではあったが、まれに見る批判的な発言は、イタリア紙の一面に取り上げられたほか、ニューヨークタイムズ紙にも載ることになった<sup>(32)</sup>。ヨハネ・パウロ2世の側近として助言をしていた学者肌の教皇は、教皇職に就いて以降、祝日の際聖母グアダルペを祝福する言葉は述べているものの、聖人ファン・ディエゴについて言及を行うことは一度もなかった。

ヨハネ・パウロ2世は、社交性が高く訪問する先々で人々を魅了した反面、バチカン内部に関心が低くその任期が長かったために、ローマにおいて長期に渡り混乱が続いた。枢機卿らは、カリスマ性や外交力よりも、バチカン内の課題や問題に取り組んでくれる教皇を求め、ヨハネ・パウロ2世の側近としてローマを良く知りつつも対照的なジョセフ・ラツィンガーがその適任とみられた<sup>(33)</sup>。しかし、コンクラーベで枢機卿らが前教皇とは正反対の人物を求めた通り、教皇ベネディクト16世は、聖母グアダルペに対する態度においても、ヨハネ・パウロ2世とはまるで正反対の人物であったといつてよい。ベネディクト16世はその在位期間中の大半を、メキシコの信者らを惹きつけるような積極的な行動を示さないまま過ごしたといえる。

## 4 列聖の実現と残された課題

### 4-1 メキシコのカトリック教会の課題

2002年7月31日の列聖式は盛大なものとなった。式には5千人の先住民を含む2万8千人が参列し、寺院の周囲には100万人近い人々が集まり、ラジオやテレビでその様子が中継された。首座大司教、列聖省長官、申請代理人、アメリカ大陸の司教代表など主要な高位聖職者のほか、メキシコ大統領ビセンテ・フォックス、メキシコの民間当局など政府関係者らも参列し、先住民の一家族が式の中でファン・ディエゴの公式像を運ぶ役割を与えられた。

しかし、ヨハネ・パウロ2世と違い、メキシコに対して特別の関心を示さなかったベネディク

ト 16 世の任期中、メキシコのカトリック教会は、列聖の際に持ち上がった新たな批判に単独で対処することを迫られた。それは、列聖式の際に公開されたバチカン公認のファン・ディエゴ像が白人のような様相のものであることに対する批判の声である。ヨハネ・パウロ 2 世はじめ、出現派らのファン・ディエゴの人物像の解釈においても、一貫してファン・ディエゴの出自は先住民であり、先住民の前に聖母が現れたことこそ、この聖母出現が「アメリカ大陸の福音」の出発点とみなされる土台であった。列聖式では、先住民文化とキリスト教信仰との融合を象徴するかのように、伝統衣装の先住民が参列し、列聖式を盛り上げたものの、ヨーロッパ人のような様相をしたファン・ディエゴ像が祭壇に運ばれていく様子はどこかちぐはぐなものであった。白人に近い様相の像の公開は、レイシズムとして批判されただけでなく<sup>(34)</sup>、教会が先住民をその救済の対象と真摯に考えているのかどうかに疑問を投げかけるものとなった<sup>(35)</sup>。

2002 年 7 月の列聖式に先立つ ENAH 大学による調査<sup>(36)</sup>では、ファン・ディエゴの列聖そのものには好意的な意見が 9 割だったが、約 500 人の回答者のうち、83% がファン・ディエゴと認識したのは先住民の像、12% が認識したのは白人の像であった。現存するもっとも古い肖像の一つではあっても、像が描かれたのは出現から 200 年が経過した 18 世紀半ばであり、当時の口承を反映したものなのか、それともイデオロギーに影響されたものなのかは定かではない<sup>(37)</sup>。2002 年の列聖のとき、すでに教皇ヨハネ・パウロ 2 世の病状は進んでおり、式の最中にも時折眠っているかのように見える場面があったが、列聖から一周年の 2003 年 7 月 31 日には、教皇からは祝福の言葉はおろか何もコメントがなく<sup>(38)</sup>、その後 2005 年に逝去するまで、バチカンが聖人ファン・ディエゴについて何かを言及することはなかった。

#### 4-2 聖人崇敬の普及を目指して

バチカンの協力を期待できないなか、メキシコ教会はそれまでとは次元の異なる課題に取り組むことになった。最も大きな違いは、今回の相手は知識人ではなく一般信徒であるということである。公式像の公開によって信徒側に生じた疑惑を払拭し、聖人ファン・ディエゴ崇敬を広めることが、メキシコの聖職者らの当面の課題となった。

まず行われたのは、ファン・ディエゴがどのような人物であったのか、その神学的・歴史的解釈を一般信徒向けに行うこと<sup>(39)</sup>、そしてファン・ディエゴの絵には様々なパターンがあったということ強調する絵画の紹介であった。ゴンサレス・フェルナンデス (Fidel González Fernández)、チャベス・サンチェス (Eduardo Chávez Sánchez)、ゲレロ・ロサド<sup>(40)</sup>が、首座大司教ノルベルト・リベラの全幅の信頼を得て、神学と歴史学の観点から列聖の実現に多大な貢献をしたメキシコ人トリオとするなら<sup>(41)</sup>、ミサや祭儀の際に一般信徒の前に頻繁に姿を現し、ファン・ディエゴ崇敬を広めるための広報的役割を担った代表格 3 人は、メキシコ首座大司教ノルベルト・リベラ、寺院の最高責任者ディエゴ・モンロイ・ポンセ (Diego Monroy Ponce<sup>(42)</sup>)、先住民司牧活動のリーダー、ファン・オルティス・マゴス (Juan Ortiz Magos) であったといえよう。2000 年に寺院の最高責任者である修道院長 rector<sup>(43)</sup>に任命されたディエゴ・モンロイは、「史実性を信じるか否かに関わらず、聖母グアダルルーペが我々を結びつけたことは確かだ」とし、「人権を奪われた状態の先住民が注目されることは、社会にとって良い機会である」と発言して、

グアダルルーペ寺院が先住民の救済に関心を持っていることを示した。こうして列聖以降、社会慈善司牧活動、なかでも先住民の認知と向上を目指す先住民司牧グループの活動が活発化した。

先住民らを福音の対象としていることを示しつつ、この聖人崇敬を普及させるため、視覚的な装置も大いに活用された。毎週日曜午後4時には、ナワ語をはじめとする先住民の言語と公用語スペイン語による多言語のミサ（民族のミサ）が行われ、華やかな先住民の衣装を来た踊り子が祭壇に上がって参加した。また、12月9日の祝日には、先住民教会（Capuchinas）でノルベルト・リベラによるミサが行われた後、色とりどりの伝統衣装をまとった踊り子たちが、オルティス・マゴスの指揮で、巡礼者らの人だかりをよけながら、太鼓や鈴、法螺貝の大きな音にあわせて寺院から礼拝堂までを踊りながらパレードした。どの年もパレードの先頭には必ずディエゴ・モンロイがいた。伝統的な祭儀に使われる植物で飾った敷地内で、コパルを焚いてミサを行い、ミサの後にはトウモロコシで作った素朴なトルティージャ料理が振る舞われた。2000年1月から寺院が発行している月刊誌<sup>(44)</sup>には、各地の先住民らの巡礼の様子と、その文化や思想、現在先住民が置かれている社会的状況についてのコーナーが置かれ、ディエゴ・モンロイが先住民らに交じり活動に参加している様子も伝えられた。

#### 4-3 普及を妨げるもの

しかし、グアダルルーペ寺院にほど近いファン・ディエゴ礼拝堂（Santuario de San Juan Diego）の建設が遅々として進まなかったことは、ファン・ディエゴ崇敬の普及に際し大きな障害となった。当初は、礼拝堂として使用されるだけでなく、先住民のための福祉センターとして医療や教育、文化活動を提供する場となることが予定されていた。2002年12月9日にはリベラ・カレラが自ら竣工式に参加し多くのメディアに注目されたが、毎年祝日のパレードの終点でもある礼拝堂は、祝日こそテントを張り仮設の屋根が作られたものの、普段は壁だけを残した伽藍堂という状態が何年も続いた。建築資材がむき出しのままの寂れた建物の様子に、自然と物乞いの人々が集まり、近所から苦情がくることさえあった<sup>(45)</sup>。着工当初、敷地の東側に作られた仮設礼拝堂は半屋外ともいえるものだったが、少しずつ建設は進み、2010年には小さな礼拝堂と事務室が完成し、ミサを屋内で行えるようになっている。だが、大通りに面した礼拝堂は、車で行きかう人々の目にも留まる位置にあり、特に交通量の多いモンテビデオ通りから見える建物の様子は、2012年12月の時点でも10年前とさほど変わっていない。列聖から数年はメディアによって伝えられたファン・ディエゴの祝祭の様子も、報道陣の減少とともに記事にされることが減り、多くの信者でにぎわうグアダルルーペ寺院の祭壇上の公式像とは裏腹に、忘れ去られたかのような様子の礼拝堂がそのままにされている。

2004年6月から2010年12月まで毎月月刊誌に連載されていた先住民のコーナーは、2010年12月をもって突然終了する。折しも同年9月、プロセス紙によって、ディエゴ・モンロイによる献金着服とそれを教皇ベネディクト16世に密告した司教座聖堂参事会員の謎の死への関与の可能性が明るみにされたときであった<sup>(46)</sup>。司牧活動のトップのスキャンダルを機に、司教と関係の深かった先住民司牧グループもそれまでのような盛んな広報活動を控えることになり、祝日の豪華なパレードは2011年、2012年と行われず、民族のミサに参加する踊り子の数は減り簡素化した<sup>(47)</sup>。

寺院が毎年末に発行するカレンダーにも、ファン・ディエゴ崇敬の普及活動が暗礁に乗り上げたことが表れている。メキシコの教会はファン・ディエゴにメキシコ第二の宗教的シンボルとなることを期待し、それぞれの祝祭日だけでなく、毎月12日をグアダルルーペの日、9日をファン・ディエゴの日としていたが、2011年末に発売されたカレンダー以降、グアダルルーペはそのままに、ファン・ディエゴのそれは7月31日の列聖日と12月9日の祝日のみに変更された。

2010年12月22日、首座大司教ノルベルト・リベラは、ディエゴ・モンロイの辞意を受けその後任を発表した。表向きは、2000年から二期務めた司教が10年の任期を無事終えたという形ではあったが、以前から候補者のリストが用意されていたわけではなく、急場をしのぐ突然の指名だったようである<sup>(48)</sup>。2000年1月から発行されてきた月間誌はその後3か月休刊、4月の表紙を飾ったのは「新体制」の文字であった。ベネディクト16世の最初で最後のメキシコ訪問が告知されたのは、この事件の翌年2011年12月であった。

#### 4-5 公式のファン・ディエゴ像のゆるやかな受容

しかし、公式像のファン・ディエゴについて言えば、列聖後まったく一般信徒に受け入れられなかったとはいえない。列聖直後に行商人が公式像の売れ行きの良さを話した通り、白人のほうが優れていると考える人が多い混血の国においては、必ずしも白人の聖人像が好まれないわけではない<sup>(49)</sup>。筆者は2010年から2012年に行った調査の中で、以前から用いていた調査票に加え、どのようなファン・ディエゴ像を好むかという設問を新たに設けて、公式像、および寺院周辺で実際に売られている非公式像など6枚のファン・ディエゴの像のバージョンを被験者に見てもらい、二つまで選択が可能という条件で質問を行った。どちらの年の調査結果からも見て取れるのは、聖母を伴った構図であれば、ファン・ディエゴの姿が先住民かそれとも白人かでは、人気に大きな差が見られないということである。被験者らにとってより重要なのはその像の構図の中に聖母の存在があることであり、ファン・ディエゴの姿は、先住民らしい姿であっても、公式像のファン・ディエゴ像の左右を反転させて聖母と向き合わせただけの白人に近い姿のものであっても、どちらがより好まれるかに大きな差は見られない<sup>(50)</sup>。

物議を醸した列聖式での公開から10年が経過し、一般信徒が公式のファン・ディエゴ像を見慣れ、抵抗感が薄らいできた可能性を示しているといえよう。

### 5 ラテンアメリカ司教団の動向

2012年12月12日、それまであえて言及を避けてきたかに見えたベネディクト16世が、聖母グアダルルーペに積極的な態度を示す出来事が起きた。生前退位を表明する2か月前に行われた、教皇によるツイッターの開始である。厳格な印象のベネディクト16世のイメージをくつがえすような行為は、驚きとともに各国で伝えられたが、その日がまさに聖母グアダルルーペの祝日であった。この聖母祝日を記念してその日を選んだことをより明確に示すために、教皇はグアダルルーペ像を抱いたバチカン勤務のメキシコ人女性記者を同席させた。教皇がツイッターを始める様子は、額縁に収められた聖母像と共にAP通信の写真等を通して世界に広まった<sup>(51)</sup>。

メキシコ訪問の告知とほぼ時を同じくして、2011年12月、バチカンではラテンアメリカ諸国

独立200周年を記念して、グアダルーペの祝日のミサが行われた。メキシコの司祭ミゲル・イダルゴは、1810年、グアダルーペ像を旗印に蜂起したが、他のラテンアメリカ諸国でもこれにより独立の機運が高まり、多くの国が1810年から40年代に宗主国からの独立を果たしている。そのため聖母グアダルーペは、メキシコの独立のみならずラテンアメリカ諸国の独立の象徴と解釈されている。翌2012年には、聖母グアダルーペが最初に出現したファン・ディエゴの祝日12月9日から聖母祝日の12日にかけて、ラテンアメリカ司教団とコロンプス騎士団によって、グアダルーペ研究所の協力のもと、国際会議が開かれた。指揮を執ったのは、ラテンアメリカ委員会委員長を兼任する司教省長官のマリオ・ウエレット (Mario Ouellet) 枢機卿であった。これは、1999年1月22日にヨハネ・パウロ2世がメキシコ訪問の際に発布し、聖母グアダルーペの出現を「現地文化に完璧に適応した素晴らしい福音の一例 (un gran ejemplo de evangelización perfectamente inculturada)」とする使徒的回勅「アメリカにおける教会 *Ecclesia in America*」をもとに、聖母グアダルーペの出現を見直そうというものであり、ベネディクト16世によって2010年に設置された新福音化協議会の、新たな福音宣教を推進するものである<sup>(52)</sup>。ベネディクト16世の初ツイートは、この会議の最終日に行われたのである。2か月後の2013年2月に生前退位が発表されるが、このときすでに教皇は辞意を固めており、ベネディクト16世は、ファン・ディエゴ列聖という議論をはらむ聖母グアダルーペについて特に言及することのないまま、聖母を次世代のカトリック界に託した。

聖母グアダルーペは、1910年に教皇ピウス10世によってラテンアメリカ全土の聖母に、1945年に教皇ピウス12世によってアメリカ大陸の女帝とされていたが、ヨハネ・パウロ2世のこの使徒的回勅によって、聖母がアメリカ全土の女王であり守護聖母であることがより明確に示された<sup>(53)</sup>。1967年のパウロ6世の回勅によって、バチカンが南北問題への関心を明確にし、ラテンアメリカ司教協議会を結成させたことをきっかけに連帯意識が生まれ、自国の課題に目覚めたラテンアメリカの司教らは、改革推進の母体として台頭し始めた。貧者を救済の対象とする解放の神学は、ヨハネ・パウロ2世によって80年代半ばに再評価された。ファン・ディエゴをめぐることは、1974年にラテンアメリカの聖職者らから平信徒の模範にと列聖の実現を願う声が上がっていたが、列聖をめぐる過程のなかで、ラテンアメリカの司教らの協力関係がさらに強化されたことが、グアダルーペ研究所の協力のもと行われたこの会議に貢献したと考えられる。ベネディクト16世がメキシコを訪問した際に訪れたのはミゲル・イダルゴが蜂起したグアナファト市であった。独立200周年は、征服による混血民族の始まりと福音という共通項に続き、今度は独立という共通項をもって、ラテンアメリカ諸国の教会が、さらなる結束力を強める好機となりうるのである。

## おわりに

2012年3月のコンクラーベに参加した115人の枢機卿のうち49人は、8年前のコンクラーベにも参加し、清貧を印象付けるホルヘ・マリオ・ベルゴリオが、最後までラツィンガーと票を争った人物であることを知っていた。枢機卿による未成年者への性的虐待、バチカン内部文書流出など、ローマでは様々な問題が表出していたが、5回の投票という比較的短い期間でアメリカ大陸

初の教皇が選出された。

欧州での信者数減少が懸念されるなか、ラテンアメリカでの信者数も近年伸び悩み、その聖母崇敬の中心地とされる聖母グアダルーペ寺院への祝日の巡礼者数も、ヨハネ・パウロ2世が逝去したのち2006年を境に減少に転じ、600万人を下回る年が続いていた。しかし、ラテンアメリカ初の教皇の誕生に、メキシコを含む中南米諸国は歓喜し、2013年12月の聖母祝日は再び活況に沸き、巡礼者数は前年の630万人から680万人に回復している。

メキシコの教会によるファン・ディエゴ崇敬の普及活動はここ10年余り概して不調に終わっているが、教皇フランシスコがラテンアメリカの司教団と協力し、聖母グアダルーペの顕現譚、そして矛盾を孕みながらも列聖され受け入れられていくファン・ディエゴにどのように関わるか、どのような属性を強調していくかによっては、ファン・ディエゴの普及の仕方に新たな展開があることも予想される。

## 註

- (1) “Mexico beginning to prepare for possible papal visit”, [www.zenit.org](http://www.zenit.org), 2002.01.21.
- (2) より簡便に、迅速に、安価に、平等かつ生産的に手続きが行えるよう、法廷における審議ではなく、候補者についての歴史的・神学的資料を、列聖省の顧問 *consultor* が精査することによって、手続きが行われることになった。列聖調査審問検事 *devil's advocate* と抗弁側の弁護士との両方の役割は報告官 *relator* に任され、報告官が一人で殉教や英雄的高徳を立証する責任を負い、神学と史学の顧問らがその合否を決めることになった。また資料の収集の責任はすべて地元の聖職者に任されることになった。Woodward, Kenneth L. *Making Saints: How the Catholic Church Determines Who Becomes a Saint, Who doesn't, and Why?*, New York, Simon & Schuster, 1990, p. 90-91.
- (3) *Ibid.*, p. 376.
- (4) *Ibid.*, p. 120-121.
- (5) *Ibid.*, p. 125.
- (6) その理由は、列聖は教皇による指令(*command*)であるが、列福は承認(*permission*)であるからである。*Catholic Encyclopedia Beatification and Canonization, Papal Infallibility and canonization.*
- (7) ホセ・ルイス・ゲレロは、列福と列聖の違いの説明の中で、「列聖とは、教皇がその無謬性によって、われわれの兄弟が本物で、英雄的に高徳であったこと、今は永遠の栄光にあずかっていることを証明することを意味する」と述べている。Hector Bustamante(coord.), *Juan Diego Cuauhtlatoatzin*, Mexico, Insigne y Nacional Basílica de Guadalupe, 2005, p. 102-103.
- (8) Woodward, 1990, p. 376.
- (9) *Ibid.*, p. 124.
- (10) Poole, Stafford. *The Guadalupe Controversies in Mexico*, 2006, p. 139.
- (11) *Ibid.*, p. 139-140.
- (12) Brading, David. *La Virgen de Guadalupe: Imágen y Tradición*, 2002, p. 338.

- (13) Poole, 2006, p. 141.
- (14) 彼らが証拠として提出した肖像は、16世紀の木版に描かれた作者不明の後光が描かれた肖像画、17世紀初頭の方解石の彫像、「神のしもべファン・ディエゴの真実の肖像“Verdadero Retrato del siervo de dios Juan Diego”」で、どれもフランシスコ会士の身なりをしていた。
- (15) 新しい列聖審査規程“New Laws for the case of saint”の全文はバチカンのHP、もしくは *Juan Diego Cuauhtlatotzin*, 2005, p. 120-123 を参照。
- (16) 報告官 *relator* は列聖省に所属する神学、歴史学、そしてローマでの調査段階の手続きの専門家で、協力者らの助けを得て、候補者の高德や殉教、奇跡の調査を他の者が行うのを準備し手配する。必要要件を満たすことを確認し、協力者の調査を指示し、困難を解決して手続きが順調に進むように指揮する。Fitzpatrick “Glossary of Terms” in *Woestman, Canonization*, Poole, 2006, p. 281.
- (17) この時点では申請代理人はローマ在住の者でなくてはならなかった。Poole, 2006, p. 140.
- (18) *Ibid.*, p. 147.
- (19) *Ibid.*, p. 149.
- (20) *Ibid.*, p. 150.
- (21) Juan Pablo II, Homilia de su santidad Juan Pablo II, ciudad de México, Domingo 6 de mayo de 1990.
- (22) Poole, 2006, p. 151.
- (23) Palabras del Santo Padre Juan Pablo II con Motivo de la inauguración de la capilla de la Virgen de Guadalupe en las grutas vaticanas, 1992.05.12.
- (24) ファン・ディエゴの場合、もう一つの奇跡は列福後まもなく起こった。1990年5月、ファン・ホセ・バラガン・シルバ (Juan José Barragan Silva) はアパートの10階から転落し意識不明の重体となったが、息子の転落を目撃した母が、ファン・ディエゴの願いを聞き息子を救ってくれるよう聖母に神へのとりなしを祈ったところ、奇跡的に回復したというものである。その回復が医学的に説明がつかないことがバチカンの調査で確認された。しかし、彼はメディアによる追求を避けてその後アメリカに移住し、列聖式にも参列しなかった。Poole, 2006, p. 190.
- (25) *Ibid.*, p. 191.
- (26) *Ibid.*, p. 168, 筆者の記憶による限りではこの文章は掲載後数か月で削除されたが、ホームページの改変はしばしば行われている。
- (27) *Zodiaco Mariano*, pp. 19-129, /Hector Bustamante(coord.), *Juan Diego Cuauhtlatotzin*, Mexico, Insigne y Nacional Basílica de Guadalupe, 2005, p. 179.
- (28) Poole, 2006, p. 183/*Reforma*, 2003.01.07.
- (29) *Ibid.*, p. 173-176.
- (30) *Ibid.*, p. 198-190.
- (31) “Visita de su santidad Benedicto XVI a México y Cuba” *SIAME*, 2012.03.22.
- (32) Poole, 2006, p. 374-376.
- (33) Allen, John L. *The Rise of Benedict XVI*, 2005, p. 120-121.
- (34) Poole, 2006, p. 185.
- (35) “Rechazan indígenas al santo Juan Diego”, *Reforma*, 2003.07.30.
- (36) “Una encuesta de la ENAH revera la oposición a esa estampa”, Agosto 2002, número 30.

- (37) Poole, 2006, p. 185.
- (38) “Ignora Papa el aniversario de Juan Diego”, *Reforma*, 2003.07.31.
- (39) Rivera Carrera, *Juan Diego: El Águila que habla*, 2002.12.09.
- (40) Hector Bustamante(coord.), *Juan Diego Cuauhtlatotzin*, México, Insigne y Nacional Basílica de Guadalupe, 2005.
- (41) Brading. David A. , *La Canonización de Juan Diego*, p. 25.
- (42) ディエゴ・モンロイ・ボンセは単に Rector de Guadalupe と呼ばれることが多いが、正式な役職名は、Vicario General y Episcopal de Guadalupe y Rector del Santuario (司教総代理兼修道院長) である。5 回目の教皇訪問の際には、教皇訪問の主催者、責任者を務めた。
- (43) グアダルルーベ寺院の最高責任者は、シュレーンブルグまでは abad (大修道院長) であったが、ヨハネ・パウロ 2 世によって 1998 年 12 月 12 日に公布された小勅書をもって、abad によって統括される一つの colégio de canónigos (司教座聖堂参事会) の代わりに、首座大司教の管轄下にある Santuario Nacional (国民の聖地) と Cabildo Colegial の二つの組織が置かれることになり、首座大司教によって指名される rector (修道院長) が、寺院とその事務局を統括するようになった。Brading, 2009, p. 71.
- (44) Boletín Guadalupano は、2000 年当時は寺院内の公式の売店において 20 ペソで冊子の購入が可能であったが、その後無料配布となり、現在は寺院のホームページにおいてその月のものが無料で閲覧できるようになっている。
- (45) “Juan Diego, santo que aún no tiene templo”, *Excélsior*, 2012.07.21.
- (46) グアダルルーベ寺院への巡礼者らにより広い場所を提供するため、同司教の献金の呼びかけのもと建設が予定されていたマリア広場 Plaza Mariana だが、9 年経っても建設は始まらず、メキシコ通信王カルロス・スリムが、この約 5 億円の事業を無料で行うことになった。“Muerte en la Basílica”, *Proceso*, 2010.09.28/ “Diego Monroy deja la Basílica y...sus multimillonarios negocios”, *Proceso*, 2010.12.12.
- (47) ディエゴ・モンロイはその後一年間、地元の教会で司牧を行い、ファン・ディエゴ礼拝堂の礼拝堂付き司祭 (capellán) として戻り、同礼拝堂の建設事業を引き受けるようリベラ・カレラに指導され、今後も司牧活動を続けることを示唆した。“Asume Mons.Monroy construcción del Santuario de San Juan Diego”, *SIAME*, 2012.03.15.
- (48) “Atribuye Masferrer a los escándalos relevo en la Basílica,” *Reforma*, 2010.12.28.
- (49) “Juan Diego, ¿un hombre blanco?”, *Terra*, 2002.07.
- (50) 調査は 2010 年、2012 年とも、12 月 9 日から 5 日間に寺院の入り口付近で行った質問票調査によるものである。各年の有効回答数は 107/111 人。選択肢別の割合は、公式像 (14.6/12.2%)、公式像と聖母 (30.7/37.8%)、非公式像と聖母 (30.7/31.8%)、非公式像 (2.9/1.1%)、像を見たことがない (1.5/0.7%)、どれも違いはない (3.6/6.1%)、その他 (0.0/1.2%)、無回答 (5.1/2.0%)。提示した 6 枚の像は、①公式像、②公式像を反転させ聖母と向かい合せた像、③先住民の様相をしたファン・ディエゴと聖母の像：Jorge Gonzales Camarena 作、1957 年。当時カレンダー等として広く流行した、④先住民の様相をしたファン・ディエゴと聖母の像：作者不詳だが③と同時期に書かれたと思われるもの、⑤もとは③と同じ構図の像であったが、ヨハネ・パウロ 2 世が描き足されたもの：作者不詳、⑥非公式像：Gabriel Chavez de Mora, Victor Arturo Cordero 共作、1998 年。最初の礼拝堂跡地に建てられた Capuchinas に祀られており祭儀にも使われたことのある像である。

- (51) “El Papa ya tuitea”, *Excelsior*, 2012.12.13.
- (52) “Del 9 al 12 diciembre el Congreso sobre la Iglesia en América: Problemas y desafíos a la misión,” *NEWS.VA*, 2012.12.07 .
- (53) Post-Synodal Apostolic Exhortation, *Ecclesia in America* 「1531年にテペヤクの丘で聖母がファン・ディエゴの前に現れたことは、決定的な福音の達成であった。この影響はメキシコの国境を越え、大陸全土に広がった」 11:20 「中南米のみならず北米でも、聖母グアダルルーペはアメリカ全土の女王として崇敬されている」 11:22 「聖母グアダルルーペはアメリカ全土の守護聖母であり、初めての新たな福音の星である」 11:23 John Paul II, 1999.01.22.

## A 10 años de la Canonización de San Juan Diego: La Situación de su Devoción después de una Década

Chihagi NAKAMURA

Desde el 31 de julio de 2002 cuando un indio Juan Diego fue canonizado por el Papa Juan Pablo II, habían dos conclave para elegir los próximos papas en estos diez años. La canonización fue terminada y su existencia fue afirmada por el Santa Sede después de muchos años de los debates entre los guadalupanos y antiguadalupanos. Pero la próxima tarea de los sacerdotes mexicanos fue introducir la figura del santo nuevo y difundir su devoción entre los fieles quienes no tenían casi ninguna idea sobre él. En la primera parte, resume los procedimientos de las causas decididos por la Congregación para la Causas de Santos y su tendencia fácilmente influida por la intención política de ambos lados de los obispos locales y los vaticanos. Después se examina concretamente el ejemplo de la beatificación y la canonización del indio Juan Diego. A lo largo de su procedimiento de las causas asumieron unos datos que no siguieron el acontecimiento guadalupano que se narró Nican Mopohua y unas veces se habían cambiado la figura histórica de Juan Diego y la interpretación teológica para que se pasara la exámen de la Congregación. El papa siguiente mencionó nada sobre este santo. Sin ayuda del Vaticano los sacerdotes mexicanos han luchado contra la controverción que la imagen oficial representa más a un hombre hispano. En este artículo se examina la situación de la devoción por el santo con las informaciones de trabajo campo y también con las de encuesta de test visual realizada en los días festivos en 2010 y 2012 mostrando seis imágenes distintas de Juan Diego. No se han aceptado tanto la figura oficial que presenta la jerarquía católica pero si la imagen está acompañada por la Madre les resulta más fácil aceptarla a los fieles no importa si su figura se parece a un hombre indígena o al hispano. La influencia del Papa Juan Pablo II sigue viva en México pero el primer Papa de las Américas puede cambiar la situación indeceable del santo.